

# 本の行商とワシントン伝 ——メイソン・L・ウィームズと建国期の書物——

山 田 史 郎

## はじめに

「ジョージよ、庭の向こうのあの美しい小さな桜の木を誰が切ったか知っているかい」と、父は尋ねた。それは、きびしい質問であった。ジョージは少しの間たじろいでいたが、しかしすぐに気を取り直した。なにものにも屈しない、言葉では言い表せない不思議な真実の力を得たかれは、さわやかに輝く面もちで父を見つめ、勇敢に叫んだ。「嘘はつけないよ、父ちゃん。ほく、嘘はつけないよ。ほくが自分の斧で切りました。」

「私の腕のなかに来なさい、最愛の息子よ」と、父は駆け寄りながら叫んだ。

正直に告白したことを誉める父の腕の中で、おそらく涙したであろう6歳の少年がジョージ・ワシントンであり、この逸話を盛り込んだワシントン伝記を著したのが牧師メイソン・L・ウィームズ（1759-1825）であることは、よく知られている。もちろん、その伝記に挿入された数々のエピソードについては、後の歴史家たちによって真実性に乏しいと指摘されていることは言うまでもなく、したがってウィームズを史実に依拠する正確な伝記の作者とみなすことはできない。むしろ、荒唐無稽な逸話を捏造しながら、革命・建国の英雄像を創作することによって、新生国家の国民意識の形成に貢献した作家として、ウィームズを捉えるのが妥当であるとされている。<sup>1</sup>

しかし忘れてならないのは、作者ウィームズが、南部の各地を渡り歩き、人の集まる所で、

「婦女誘拐、革命、殺人はいかがですか」と叫んで商売する本の行商人であったことである。ヴァージニア州のある町の酒場の軒先に店を出してトマス・ペインの『理性の時代』を売っていた彼は、ある聖職者からよくそのような社会に害毒を与える本を売るものだと詰問されたときに、即座にペイン批判の書を取り出し、「解毒剤を見て下さい。毒と解毒剤の両方ございます」と言って売りつけようとした行商人でもあった。<sup>2</sup>

行商人としてのウィームズの再評価は、すでにマーカス・カンリフによってなされている。最近では、キャシー・N・デヴィッドソンやロナルド・ツボレイらが、革命後から19世紀前半における時期の書物の印刷・出版・流通・読者について包括的な研究を著しているが、ウィームズは輸送・流通機構の不十分な時代に書物の普及に精力を傾けた個性的な行商人として重視されている。<sup>3</sup>

ロバート・ダーントンの「コミュニケーション・サーキット」の構図を引用するまでもなく、書物の販売業者である本屋や書籍行商人は、著者・印刷出版業者と読者との間に位置する「メディア」的存在である。著述と販売の両方を通

1. Mason L. Weems, *The Life of Washington with Curious Anecdotes, Equally Honorable to Himself and Exemplary to His Young Countrymen* (Philadelphia: Mathew Cary). 本稿では、便宜上、マーカス・カンリフが序文を付けて第9版（1809年）を編集したハーヴァード大学出版局版 Marcus Cunliffe, ed., *The Life of Washington By Mason L. Weems* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1962) から引用箇所を示す。桜の木の逸話は、同上書、p.12。カンリフの序文は、後世のウィームズ評価の批判的検討など示唆に富み、その優れた洞察は現在でも色あせていない。

2. *Ibid.*, xxvi-xxvii.

して建国期アメリカの活字の世界の形成に参画した人物として——「書物の歴史」の観点から——ウィームズを捉え直す必要があるのではないか。近年の文化史研究の動向に敏感であるならば、この行商人作家を、英雄神話を創造した人物として「アメリカン・ヒーローの系譜」におさめることで満足してはいられない。<sup>4</sup>

## I 放蕩息子の大覚醒

メイソン・ウィームズは1759年10月メリーランド植民地アン・アルンデル郡ヘリング・ベイのマーシズ・シートに生まれる。父親は、スコットランドの出身で、メイソンは、19人兄弟の末っ子であった。幼少のころについてはほとんど分からない。メリーランドでなんらかの教育を受けたようであるが、10歳から16歳までジェニファー郡セント・トマスの学校、ケント郡チェスタータウンのケント・フリー・スクールなどに学んだとされる。この間、2人の兄が保有する商船で航海に出た可能性がある。77-79年の間、エディンバラ（あるいはロンドン）で医学を学んだらしい。独立革命戦争中は、英国軍の医師をつとめたという話も残っている。79年、父の死亡でメリーランドに戻り、その際、遺産として彼に残された奴隷を解放したようである。

3. Cathy N. Davidson, *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America* (New York: Oxford UP, 1986), p.24; Ronald J. Zboray, *A Fictive People: Antebellum Economic Development and the Reading Public* (New York: Oxford UP, 1993); James N. Green, "From Printer to Publisher: Mathew Carey and the Origins of Nineteenth-Century Book Publishing," in Michael Hackenberg, ed., *Getting the Books Out: Papers of the Conference on the Book in 19th-Century America* (Washington, D.C.: Library of Congress, 1987), pp.26-44; James Gilreath, "Mason Weems, Mathew Carey and the Southern Book Trade, 1794-1810," *Publishing History*, 10(1981): 27-49.

4. Robert Darnton, "What is the History of Books?" *Daedalus*, 111 (1982): 65-83. 「書物の歴史」に関しては、ロジェ・シャルチュ『書物の秩序』（文化科学高等研究院、1993年）；拙稿「書物の歴史——アメリカン・アンティークエリアン・ソサエティのプログラム」『同志社アメリカ研究』第29号(1993)、pp.63-73.

80年からイギリスで今度は聖職者を志して教育を受ける。英国国教会で牧師の任命を受けようとしたが、アメリカ人であることを理由に認められなかったという。オランダのハーグにいたジョン・アダムズに、またパリにいたベンジャミン・フランクリンに牧師任命の支援を求める手紙を書いている。結局84年9月、カンタベリ大司教により任命を受けた。ここまでのいきさつについては不確かな部分が多すぎるために、かなりの留保が付けられねばならないけれども、「革命戦争中にイギリスで教育を受けた国教会牧師」という経歴は、その後のウィームズを理解するのに不可欠な要素と見ることができよう。

84年、25歳で帰国したウィームズは、生まれ故郷に近いヘリング・クリーク郡のサウス・リバーにあるオール・ハロウズ教区の牧師となり、89年までその職にとどまる。91年にウェストミンスター・セント・マーガレット教区に転任した。同年、ロバート・ラッセルの説教集を出版し、書物の出版と販売の仕事を開始した。続いてヒュー・ブレアの説教集（92-93年）、ハンナ・ムーアの『通俗世界の宗教』（93年）を出版した。これらの宗教書とともに、自慰行為の危険を警告するパンフレットなども出版した。<sup>5</sup>

1792年の聖公会のある牧師の日記に、アナポリスでウィームズが本の行商をしていたことが記されている。その牧師は、自分が教会で説教をしていると、ウィームズが入って来るのを目撃し、「ウィームズが行商の生活をしているのを見るのは悲しい」と記している。旧知の間柄であったその牧師は、行商途中のウィームズが、おそらくは薄汚れた身なりで教会に現れたのを見たのか、同情を寄せたのであろう。<sup>6</sup>

国教会牧師が行商に転じた背景には、革命後のメリーランドにおける英国国教会の衰退と国教会聖職者たちの没落があった。同州の国教会聖職者の3分の2以上が革命期にはロイヤリストの立場に立った。そのかれらが、革命後に正

5. ウィームズの経歴については、Emily Ellsworth Ford Skeel, ed., *Mason Locke Weems: His Works and Ways*, 3 vols. (Norwood, Mass., 1929), pp.xiv-xxiv; Cunliffe, pp.ix-xiii.

6. Cunliffe, p.xi.

常な教会活動を維持し、国教会の信仰を説き続けることは容易ではなかった。教会はかつてのエスタブリッシュされた地位を失い、牧師は極度に貧しい境遇に陥った。ウィームズ個人に関して牧師としての社会的、経済的状況を示す証拠はないが、イギリス帰りのかれが、他の国教会牧師よりもよい境遇にあったとは考えにくい。むしろ、三十路を越えたウィームズが、国教会牧師以外の領域に、人生の進路を見つけることを余儀なくされたと考える方が自然である。

しかし、昔の知人から同情の眼差しを向けられるほど、牧師から行商人への転生は、ウィームズにとって悲哀に満ちたものであったのだろうか。国教会牧師となるため独立革命中に英国に滞在するという「過ち」の故に、重い「罰」を受けるのは避けられないことではあった。しかし、より重要なことは、「留守」をした間に「家」で生じた変化が、放蕩息子を目覚めさせ、新たな人生の出発へと主体的に向かわせたのではないかということである。

アメリカ独立革命は、自由、平等、主権、代表といった問題を自己の問題として捉えることができる民衆を生み出していた。権威や伝統や地位を尊重する規範は薄弱となり、非エリートであっても、世論形成を通じて自己の求める政治の到来を期待することができた。これと同様に、宗教においては、自己のイメージに即してキリスト教を形作る希望を持つことができたようになった。このような中で、メソジストとバプティストの猛烈な浸透、あるいは黒人教会の台頭に代表される民衆レベルの信仰復興運動が、革命後のアメリカを揺り動かしていた。ウィームズがいたチェサピーク湾地域では、メソジストのカリスマ的指導者フランシス・アズビューリーの巡回説教が地方の零細農民や黒人の熱狂的な結集を作り出し、民衆に回心の機会を提供した。<sup>7</sup> 1780年代後半に教会でウィームズ牧師を観察した人々の証言は、ウィームズも、福音主義的信仰復興運動の激震に巻き込まれた同時代人

のひとりであったことを推測させる。上司格の牧師たちは、ウィームズが教会に「メソジストの賛美歌や歌曲を持込んだ」と不満を述べたし、同僚の牧師たちは、「理性や品位になんの関心も払わないで、ただ情熱をかきたてるかれの方法」に驚いているのである。<sup>8</sup>

ウィームズが民衆的福音主義運動の影響を受けたと仮定すると、かれと活字との関わり、とくに著述だけではなく、本の行商販売にまで乗り出したことを理解する手がかりが見えてくる。

R・アイザックがヴァージニアについて論じるように、18世紀中頃までの南部では低い識字率と伝統的な口承文化によって、一般民衆が活字と直接に接する機会のごく限られていた。教会や法廷における儀礼的行為を通して活字の知識に支えられたジェントリー・エリートの権威が、一般民衆から不動の敬意を集めていた。こうした文化体系は、世紀中頃以降、弱体化し、覆されていく。N・ハッチが言うように、信仰復興運動によって、聖書とその解釈が一部の学識者の独占から解き放たれ、多くの読者を集める宗教ジャーナリズムの勃興に代表される福音主義運動は「活字の大衆化」を促す重要な役割を演じた。宗教以外の分野でも、革命の進展と共和主義的言説の台頭の中で、特定の書物によって培われた法曹の学識に体现される権威の概念も覆され、非エリートを対象とする新聞やパンフレットがより重視されるようになる。18世紀後半以降の社会的変化は、活字をとりまく文化の変容を伴った。<sup>9</sup>

建国期における活字の世界の広がりについては、稿をあらためて詳細に論じなければならない重要なテーマであるが、ここではいくつかの例示的証拠をあげるだけにとどめておきたい。まず、18世紀末には、小説、特にアメリカ人作

7. Nathan O. Hatch, *The Democratization of American Christianity* (New Haven: Yale UP, 1989), pp.67-122.

8. Steven Watts, *The Republic Reborn: War and the Making of Liberal America, 1790-1820* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1987), p.143.

9. Rhys Isaac, "Books and the Social Authority of Learning: The Case of Mid-Eighteenth-Century Virginia," in William L. Joyce, et al., eds., *Printing and Society in Early America* (Worcester: American Antiquarian Society, 1983), pp.228-49; Hatch, pp.141-46.

家によるセンチメンタル小説の出版がおこり、多くの部数が売れはじめた。1794年に印刷業者マシュー・ケアリーは、男の甘い言葉に唆され、捨てられ、あげくのはてに出産し、失意のうちに死亡する少女の物語『シャーロット・テンプル』（スザンナ・ロウソン作）を、1000部出版した。この部数は当時としては少なくなく、出版業者としてはかなり思い切った部数であった。しかし、この小説はその予想をはるかに上回る数の読者を獲得し、ケアリーは何度も増刷を繰り返した。かれの出版による正規版に加えて、おびただしい数の海賊版も現れ、それらを合計すると1810年までにはおよそ4万部が売れた。20年代に入ると、初版で1万部刷られる小説は珍しくはなくなり、30年代には「ストーリー・ペーパー」と呼ばれる、新聞として郵送される小説読本が、一冊平均で3万部発行されるようになる。<sup>10</sup>

一方、18世紀末以降、新聞や雑誌にも変化が現れた。『コロンビアン・マガジン』に代表されるように、1780年代から90年代にかけて、政治から文芸まで総合的な内容を特色とする建国期雑誌が花開く。学識ある一部のエリートだけではなく、職人・ショップキーパー層も雑誌購読者のなかに含まれるようになった。<sup>11</sup>

雑誌以上に読者の社会的な広がりを持ちはじめていたのが新聞であった。全米の新聞数を見ると、1790年から1810年の間に、90紙から370紙に増加した。量的な変化だけでなく、質的な変容もあった。この期間に相次いで現れた新聞には、ジェファソニアン＝リパブリカンの新聞が少なくない。それらの多くは、都市・農村を問わず、比較的下層の職人・労働者層を購読の対象とし、社会上層への敬意や礼儀を否定する反エリート主義を掲げ、日常の、粗野で飾りのない言葉や表現を多用した。マサチューセッツ州辺境に住む無学な農民ウィリアム・マニングが新聞への投稿を試みてかなわなかった『自由

の鍵』（1798年）と題する論稿は注目に値する。そのなかで、著者は、自らが熱心な新聞購読者であることを強調したうえで、少数のエリートに支配されない、真に民衆が参加し、民衆の意見を代弁する活字メディアの必要を訴えたのである。すべての市民にとって、自己の意見を表明し、それを活字で伝達することが公共の責務であるとする共和主義的理念を、そこに見ることができる。<sup>12</sup>

出版物、特に書籍は、刊行部数以上の読者を得ていたと考えなければならない。というのも、19世紀中ごろになるまで本の値段はあまり低下せず、普通の書物は75セントから1ドル50セントもした。1800年の平均的な日給を見ると、大工が1ドル、未熟練労働者がその半分程度でしかなく、たとえばブロックデン・ブラウンの小説『ウィーランド』（1798年）を買うためには、日雇い労働者は丸2日働かねばならなかった。本を買うのではなく、借りることへの関心が高まるのも当然であろう。ニューイングランドで最初の図書館が設立された1731年から1800年までの間に、合計376の会員出資制の民間図書館がつくられたが、そのうちの266（71%）は1790年代の10年間につくられたものであった。18世紀末には、さらに、印刷業者や書店が運営する貸本制度も普及し、より安く手軽に書物に接する機会を民衆に提供した。<sup>13</sup>

もちろんこうした活字世界の変容と拡大が顕著となるのは、19世紀中ごろになってからであり、またウィームズが主な生活圏とした南部は、北部と比べて伝統的に識字率が低く、書物の印刷と出版、新聞・雑誌の普及、図書館の創設などの点で大きく立ち遅れていた。しかし、そうであるからこそウィームズにとっては、聖職に代わる、生活の糧を得る仕事として、書物を扱

10. Davidson, p.17.

11. 拙稿「建国の知識と秩序——雑誌と読者の歴史にむけて」『同志社アメリカ研究』第27号（1991年）、pp.35-48.

12. Hatch, "Elias Smith and the Rise of Religious Journalism in the Early Republic," in Joyce, et al., eds., *Printing and Society in Early America*, pp.250-77. マニングについては、Michael Merrill and Sean Wilentz, eds., *The Key of Liberty: The Life and Democratic Writings of William Manning, "A Laborer," 1747-1814* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1993).

13. Davidson, pp.24-29.

うビジネスの大きな可能性を確信することでもきたはずである。そして、この確信が、当時のアメリカでもっとも野心的で成功しつつあった書物出版・販売業者マシュー・ケアリーとのパートナーシップを実現させたのである。

本格的に書籍行商で身を立てる決意を固めつつあった1794年、ウィームズは南部で販売する本を買い求めるためにNYにまで足をのばした。その途中フィラデルフィアに立ち寄り、ケアリーと出会う。93、94年と連続して大規模な黄熱病の流行に襲われた合衆国の首都フィラデルフィアは、さすがに憲法制定会議が開かれていたころの華やかさを失っていた。しかしそれでも、ウィームズにとっては都会の活力は圧倒的であったろうし、とくに目抜き通りのマーケット街にけっして小さくはない店舗を構えるケアリーに対して、ある種の羨望と尊敬の念を抱いたとしても不思議ではない。

ちょうどケアリーは、印刷業を廃し、書物の出版と販売で商売を拡大しつつあるところであった。予約販売の形式で、W・ガスリーの『現代地理の新体系』やO・ゴールドスミスの『図説自然誌』、あるいはスザンナ・ロウソンのセンチメンタル小説などの出版を相次いで手掛けたところであった。<sup>14</sup> 未開拓の南部で行商するウィームズとの間にビジネス関係を持つことは、ケアリーにとっては期待が持てたはずである。一方、ウィームズにとっては、当時の出版の中心地フィラデルフィアでも屈指の野心的な出版業者と組むことは、願ってもないことに思えたであろう。ウィームズは小売価格の5%（後に25%）の手数料でケアリーが出版する本の販売を請け負った。当初は、メリーランド、ヴァージニア、ペンシルヴェニア南部周辺の行商にとどまっていたが、その範囲は次第に拡大し、南北カロライナからジョージアにまで達した。関係の解消による断絶はしばしばあったが、ウィームズが死亡するまで30年間にわたって出版業

者と行商人との関係は続いた。その間、ウィームズは、各種のアルマナックや、ギャンブル・飲酒・殺人・姦通・決闘などを戒める教訓的な助言書を数冊執筆し、出版した。また、ワシントン、フランクリン、ウィリアム・ペンの伝記も書いて出版している。

行商の過程で、ヴァージニア州プリンス・ウィリアム郡ベル・エアで陸軍大佐と知り合い、その娘と95年に結婚した。ポトマック川に注ぎ込むクアンティコ・クリーク沿いに位置する小さなタバコ積み出し港ダンフリーズに98年に家を買って移る。義父の死後はベル・エアで居を構え、そこを基地として南部の行商を展開した。<sup>15</sup>

## II 読書する国民の創造

行商人というと、産業化以前の時代の、謎めいたストレンジャーというイメージが根強く残っている。商品を馬の背や馬車につんで、気のおもむくまま旅に出、外部との交渉の少ない小村を渡り歩く。訪れた村では男も女も、子供も老人も、そのストレンジャーを取り巻き、かれがもたらした商品を珍しげに眺め、外の世界の情報に興味深く聞き入る。しかし翌朝には、行商人は、誰ひとり知らない間にひっそりと村を去っていく。これは単なるイメージというだけでなく、多くの行商人の現実のスタイルであったのだろう。それ故にこそ、行商人に関する記述史料はきわめて少なく、それがまたかれらを歴史の闇のなかに閉じ込めている要因にもなっている。<sup>16</sup>

この点で、ウィームズは当時の行商人として

15. 書物の流通の史的概観は、James Gilreath, "American Book Distribution," in David D. Hall and John B. Hench, eds., *Needs and Opportunities in the History of the Book: America, 1639-1876* (Worcester: American Antiquarian Society, 1987), pp.103-85.

16. Richardson L. Wright, *Hawkers and Walkers in Early America: Strolling Peddlers, Preachers, Lawyers, Doctors, Players, and Others from the Beginning to the Civil War* (Philadelphia: Lippincott, 1929).

14. この頃のケアリーに関しては、拙稿「黄熱の首都フィラデルフィア、1793年——ある印刷・出版業者と建国のメディア」金井光太郎 他『常識のアメリカ・歴史のアメリカ』（木鐸社、1993年）、pp.75-112.

は例外であったと言わねばならない。というのも、かれが出版業者ケアリーに書き送った数百に及ぶ書簡が現存しており、しかもそれらは、私家版であるためにきわめて希少部数ではあるが、エミリー・E・F・スキールによって活字化されてもいるからである。<sup>17</sup>これほど詳細に行商の実態が判明している例を他に見いだすことはできない。さらに、その書簡の中に現れる行商人としてのウィームズは、前近代的な農村社会を彷徨するストレンジャーというイメージからはほど遠い。

まず、ケアリーがウィームズに送った手紙のほとんどがもっぱら送金の催促などのビジネス・レターであったのに対して、ウィームズはケアリー宛ての手紙の中で、共和政社会における書物の出版・販売業の国家的使命を論じることがあった。ケアリー宛の最初の手紙の末尾を、「われわれが、社会に善をもたらすような本をいつも出版し続けることを願って」と締めくくっている。(12/31/94; II, 2) また、「私は[社会にとって] 価値ある本を普及させることを原則としています」(6/3/96; II, 14)とも書いたし、「国は闇の中にあり、民は無知であり、人心はすさび、行いは野蛮である。人道と愛国の精神は、声高に叫び求めている、本を、本を、もっと本を、と」(7/30/10; III, 23)と意気込んでいる。かれは、本の行商を、「偉大なる仕事」、あるいは「壮大なる計画」と呼んだ。自分が「国民の間に数千の優れた書物を広めることによって、大きな善を国に対してなしている」と見る。ウィームズが望むのは、「良き書物によって、人間の本性を啓蒙し、豊かにし、向上させ高めること」であった(1/17/11; III, 33-34)。確かに、こうしたレトリックは、道徳的教訓を満載するワシントン伝の生成と無関係ではない。

同時に、書物販売が多額の利益を生み出し、

ビジネスとして追求する値打が高いことを繰り返しケアリーに説いた。「この国は広く、おびただしい数の市民が住む。その人々の間に読書の習慣を培い、適切な書物を提供することによって有益な芸術と科学の光を遠く広く行き渡らせることは、真の博愛主義者であり思慮に富む投機家(speculator)である者の仕事である。というのも、耕作方法が適切であれば、あなたがこの実験的な畑に蒔いたお金は、30倍、60倍、100倍にもなることを信じて疑わないからです。」(4/15/96; II, 47-48) 書籍行商人としての公的使命とビジネスとしての利益追求が明瞭に表明されている。

もちろんウィームズが楽観するほど、当時の書物販売は容易ではなかった。行商人と出版業者との間で交わされた書簡は、輸送と通信のネットワークが十分に発達していない時代における流通と販売の問題を如実に照らし出している。ウィームズが各地を予告もなく移動するために、ケアリーは連絡がとれないことに常に苛立った。ある町で本が売れたことを報告する手紙をウィームズから受取ながら、その売上金がケアリーのもとになかなか送られてこない。催促しようにも、どこへ手紙を送ればいいのかさえ不明な状態に、ケアリーはしばしば激昂して、次のような手紙を送る。「あなたから私が被った処遇は、口では言い表せないほどショッキングです。あなたはとりわけ気前のよい約束をし、数週間で1000から1200ドル送ると言ったではないか。ウィームズ氏よ、あなたの私への行いは、表現の仕様がなほほど恥ずべきものです。いったい、いつお金を送ってよこすつもりなのか。」(1/25/99; II, 112-13) こうした辛辣な非難がこうじて、相互不信が積み重なり、相手への中傷・罵倒に発展し、挙げ句のはてに両者の関係は壊れ、取引が解消されることも一度や二度ではなかった。

他方、ウィームズは、苦勞して移動する行商人の実態が、都会にこざれいなオフィスをかまえるケアリーには理解されていないことに、常に深い絶望感を覚える。それとともに、自分が売りたい本、すなわち売れる本がケアリーから

17. Skeel, *Mason Locke Weems*, 3 vols. 同書は、300部のみの限定出版で、現在は散逸しているが、筆者はアマースト大学図書館特別希少資料室で閲覧した。以下、本文中で、同書からの引用箇所を明記するが、その際、出所の表記を(手紙の差し出し年月日[月/日/年]; 同書所収ページ数)とする。

送られてこないことに業を煮やした。「最悪の道を、雪や雨、さらに川では強い風に妨げられ、不快きあまりない馬での移動、というよりも地をはうことの連続を経て、この土地にようやく到着した。[略] それなのに私には、あなたのピューリタンの宗教図書を販売しなければならない不幸があるのですから、あなたの利害に何の注意も払っていないと非難して私の不幸の上塗りをするのだけは止めて下さい。」(2/24/98; II、196)

「ピューリタンの宗教書」など売れないから送らないでくれと切願するウィームズの意識のなかでは、自分は、行商を通して読者の嗜好を習知しているという自負があった。かれは日々、様々な人々と出会い、かれらが欲する書物を感知し、一般読者の好みを出版業者に伝えようとする努力が、ケアリー宛の手紙に再三現れる。一例をあげると、「私が知っている多数の商店で、綴り字教科書の莫大な需要がある。もしわたしの所にそれを240冊送ってもらえれば、たぶん数週間でたいへん多くのお金があなたのところに入るでしょう」(6/11/98; II、101)と書いている。

1806年にウィームズはケアリーに、販売手数料を5%から15ないし20%に上げるよう求めるとともに、「われわれ両者にとって明確に必要なことでありますが、売れることが確かな本を選択する裁量を私が持たねばなりません。その他の種類の本を送っていただきたくない。」(12/28/06; II、356) ニューイングランドの業者が出版した大型の高価な書籍が、フレデリクスバーグの取り次ぎ書店に送られてきたことに対して、ウィームズはケアリーに「その業者の本は一冊たりとも送るべからず。私の望みは、私が管理する書店には安価な、強力に安価な、ものすごく安価な本しか置かないことです。これによってあなたの望み——公共の利益と私的な富——は成就されましょう」(2/22/09; II、393)と書き送った。ケアリー宛の手紙の中でウィームズが繰り返し売れると確信し、巨額の収益が得られると信じた分野は、綴り字教本をはじめとする学校用教科書、アルマナック、セ

ンティメンタル小説、読み易い歴史書や旅行記などであった。

前述したように、ケアリーはウィームズの予測不可能な移動を非難し続けたのであるが、ウィームズにとって移動の大半は、販売を念頭においた、ある意味で規定のルートにそったものであったといえる。ツボレイは、ケアリー宛の手紙の発信地を丹念に調べることによって、ウィームズの行商の足跡をたどっている。それによると、移動の大半は重要な交通のルートに沿ってなされており、しかも目的地の選択には明確な理由があるように思える。<sup>18</sup>

まず、裁判、議会、あるいは競馬やリヴァイヴァル集会などが開催される人が集まる場所が選ばれている。例えば、サウス・カロライナでの行商があまり芳しくなかったことをケアリーに報告した後で、次のように書いている。「この失敗は、オウガスタとチャールストンで行われる2つの大競馬大会で容易に取り戻せると大いに期待しています。[略] もしあなたがそうすべきだとお考えならば、郡の第1級裁判のいくつかに回ってみるつもりです。法廷の開催は、一般的に長期にわたり、人も多いです。そして3年前に5回か6回の法廷開催中に大変質の悪い種類(の本)を3000ドル相当売ったことを思い出しますと、私の期待は蘇ります。」(12/26/09; II、436)

また、学校の学期始業にあわせて移動することもあった。「近辺60マイルにアカデミーが4校ありますが、それらを訪ね、知合いの教師のついでで、たぶんかなり多くの本を売ることができるでしょう」(4/27/01; II、189)とケアリーに連絡している。

さらに、説教をしながら、ついでに本を売る(あるいは本を売りながら、ついでに説教をする)方法は、ケアリー宛の手紙に幾度となく示されている。「昨夜モリスヴィルに到着しますと、住民が私に留まって、説教をするよう求めました。私は大変威勢良く話し、かれらは4冊の聖

18. Zboray, "The Book Peddler and Literary Dissemination: The Case of Parson Weems," *Publishing History*, 25(1989): 27-44.

書を買った。」(12/17/01; II、213)「来週連続して行くことになっている説教の場で、おおよそ全部の荷をさばくことになればと、願っている。」「無料で説教を聞いたあとでは、聴衆は一冊も本を買わないでいることができるほど冷酷であることはめったにない」(II、132)とまで書いている。

この他にもウィームズは、本を販売するために、多角的な方法を考えだした。例えば、ウィームズの本を置く書店を各地の主要な町に設けることによって、コンスタントな販売態勢を追求しようとした。「[ほぼすべての地区に] 小規模な書店を設け、そこで小型の歴史書や、珍しくて、面白くて、ためになる話題を取り扱ったあらゆる種類の学校用図書などを並べて置き、それをやる気をもったまじめな人物にまかせるならば、数年の内に巨額のお金を貯めることになると、わたしは完全に確信しています。」(7/29/98; II、104)

新聞や雑誌に広告を出す方法もとられた。1810年代初頭には、はるかジョージアへの行商に赴くが、ウィームズにとっては、未知の土地であり、頼れる知人も多くなかった。ウィームズは、活字の力に頼ることにし、新聞に広告記事を出した。例えば、1810年9月19日のジョージア・ジャーナルには、「ジョージアに永久に本と知識と徳を」の見出しで始まる記事が掲載された。「大量で多様な最良の書物を抱える」ウィームズの「飛行図書館」が、学校の始業や法廷の開催に合わせて到着することを告げている。「わが国のような幸福な共和国においては、名声と富はすべて能力次第であり、能力はすべて教育次第であり、したがって懸命で寛大な親は、誰から言われるまでもなく、書物がもたらすたいそう大きな利益を子供たちに与えるでありましょう」(III、25)と広告記事は締めくくられた。同年11月28日の同紙には、「子供たちへのクリスマス・プレゼントとしてワシントン伝とマリオン伝を数冊お買いになる慈愛に満ちた方々には、相当な値引きもあります」と記事を出した。ウィームズは後に、このときに600ドルの売上があったことをケアリーに報告して

いる。(III、29-30)

ビジネスとしての利益追求と出版業の公的使命を結合させるレトリックは、ウィームズをしてある独特の計画へと進ませた。その計画とは、慈善学校・教会・橋などの公共施設の建設のための宝くじの景品として本を売り込むことであった。「ある夜、もしあなたの熟考を得られるならば、純金1ポンドの産物を生むかもしれない考えが私の頭に浮かびました。私は、この州[ヴァージニア]のどこか大きな町に慈善学校を建てたいと思います。実現へのもっとも有望なやり方は、賞品として本が支払われる宝くじです。」ウィームズのアイデアとは、1枚1ドルの宝くじを2万枚売り、当選者にはケアリーの本を賞品として付与し、残りの収益金を学校を建設するために寄与することであった。「すべての良きキリスト教徒にとって、貧民と孤児の教育は第一に望むところである。あなたが予想されるよりもずっと短期間で16000ドル相当の本を売ることができると期待します。」このように書いて、計画の実現に自信を示した。(4/15/96; II、46-48) また、97年11月には、自分が住居を構えるダンフリーズに教会を建設するために、同様に本を賞品とする宝くじを発行する計画をケアリーに告げている。(11/14/97; II、92)

慈善学校と教会については、実際にウィームズが州議会に請願を出したかどうかは分からない。しかし、97年12月に、ウィームズはヴァージニア州議会に対して、郵便や輸送の便を図るために、ポトマック川上に橋をかけることができるよう、そのために宝くじの実施の許可をだすよう請願している。それによると、「請願者は、社会に広まれば公的な利益をもたらすにちがいないもっとも価値ある書物を相当数手元に持っており、寛大な許可がおりれば、好運な当選者にそれが与えられる宝くじを実施したい。」ウィームズは宝くじの収益から1千ドルを、橋の建設に寄付すると約束したが、この請願は承認されなかった。(II、92-93)。

より多くの読者を得るためには、販売方法を工夫するだけではなく、読者に受け入れられる



書物を作ることこそが必要である。ウィームズが行商の領域を越えて、読者を踏まえた書物の生成に関心を示していたことは、聖書を販売する過程で明らかとなる。ケアリーによる聖書の出版を前に、予約購読者を集めるために1800-02年にかけてウィームズはニューヨーク方面に赴いた。最初に訪れたニュージャージーで予想外の購読希望者を集め、大きな期待が膨らんだ。ただし、顧客を増やすためには、高価なものにならないように小型の聖書とするよう、ケアリーに要請した。「正当な注意が払われるならば、あなたがアメリカの聖書ビジネスを独占することは疑いありません。しかし、なによりもまず、小型の版を印刷することにしてください。」(8/14/1800; II、137-38)

1801年末になると、別の印刷業者コリンズが出版する聖書との競争に直面し、予約購読者を見つけるのに苦労するようになった。ウィームズはケアリー出版の聖書が他にはないセールス・ポイントを持つことが必要と感じ、ケアリーに様々な助言をしている。まず価格の問題があった。コリンズが4ドルで聖書を販売しているのに対して、ケアリーは8ドルの値段をつけていた。「あなたが7ドルで売ることを決めるのならば、それでも売みましょう。しかし、私は、6ドルで売ることを進言します。奴隷所有のヴァージニアならば、もっと高くてもいいのにちがいないのですが。」(11/30/01; II、208)「聖書に関して、もしあなたがそれを生涯の儲けのみなもととしたいのならば、共和国全体をあなたの顧客にしなければなりません。貴族的な値段をつけている限り、平民の財布を当てにすることはできないのです。」(1/20/02; II、227)

値段で特徴が出せないならば、せめて価格に見合う値うちのある装丁がほどこされるべきであった。ウィームズの手紙を引用する。「聖書に関して、世間の賞賛を受けるような図版にすることがいかに重要であるかをあなたが十分に考慮しないのではないかと不安です。彫版こそは、かかる大変高価な製品の主翼なのです。[略] お願いですから、彫版の見栄えをよくしておい

て下さい。すぐれた彫版は魂にとってのぜいたく、歓楽であります。悦楽とともに想像がそこに宿ります。読者は、本を閉じるのがいやになり、またすぐにわくわくして本へともどるでしょう。彫版の名声は海外にも行き渡り、聖書の売上はすばやいものとなります。ああ、紙や印刷や彫版の質を良くし、全ての人が両手をあげて、眼を開き、<神よ、なんと優美な>と叫ぶようにしようではありませんか。」(4/13/02; II、233-34)

出版業者ケアリーに差し出された手紙は、ウィームズがたんなる書物の運び手ではなかったことを告げている。前近代的な書物の流通・輸送の障害を克服すべく、多角的な販売方針と市場の開拓に乗り出した。読者顧客との接触から、書物市場の動向を把握し、それを基に売れる本、読者に受け入れられる本の創造に関与しようとした。読者による受容の予測を基準に、テキストから版型、紙質、印字、装丁、製本、価格、流通・販売の方法にまでわたる出版文化の総体がかれの射程に入れられた。ウィームズは、書物を消費の観点から捉えた最初のアメリカ人のひとりではなかったか。ワシントン伝は、そうしたかれが目指す理想の書物にほかならない。

### Ⅲ 知の意匠

早くも1797年に、ウィームズはケアリー宛の手紙において、独立戦争の英雄の伝記は売れると提言している。「私の経験からすると、民衆の好奇心をさそうように仕組まれた内容の、小型の、つまり25セントの本は、もし大量部数刷られ、適切に流通されるならば、[それを出版する] 思慮深い勤勉な企業家に巨大な収益をもたらすでしょう。もしあなたが、ウェイン、パトナム、グリーンなどの軍人——その勇氣と能力、愛国心と英雄行為がアメリカ国民の敬愛と賞賛を受けている人々——の伝記を小型の版で印刷し、たいへん興味深い口絵を付けるならば、疑いなく、莫大な数を売ることになるでしょう。国民は、自分たちの想像力を駆り立ててくれるものには、25セントを惜しまないでしょう。金

銭的な値うちのあるものを国民に提供しようではありませんか。」(1/12/97; II、72) まだ存命中であったワシントンの伝記とは特定されてはいないが、国民が読みたがっている独立革命の英雄の伝記というテキスト、25セントという価格、大部数という出版規模、適切な流通方法、口絵という装丁がすでにウィームズの頭の中にあったことは面白い。

その2年後にも同様の手紙をケアリー宛てに書いている。「アメリカ戦争と革命の十分に評価を得た数編の歴史書——1枚刷りで、その歴史のもっとも興味深く感動的な部分から選ばれた章で構成され、上手に印刷され、ひとつないしふたつの挿絵で飾られた、民衆に好まれる書物——があれば、私はあなたのために大きな額のお金をもうけることができると信じて疑いません。」(3/25/99; II、116)

99年の前半には、ウィームズは自らワシントン伝の執筆に着手していた。6月24日付けケアリー宛手紙で、次のように書いている。「私は、ワシントンの美例という表題になる(あるいはそうなる予定の)1編をほとんど印刷できるまでに準備できています。これは、きれいに書き上げられ、生き生きとした逸話で飾られ、私のあさましい意見ではく民衆に人気のある——大衆向けの書物>に見事に適合しています。私のためにこれを印刷していただき、次のようにしてその英雄の銅版口絵を発注していただけますでしょうか。」ウィームズは、手紙に自分でワシントンの口絵のイラストまで書き、<ジョージ・ワシントン殿 国家の守護神>などの文句をそれに添えている。(6/24/99; II、120) ケアリーからは何の返事もなかったようである。

99年12月14日、ワシントンが他界する。その直後から聖職者や政治家が追悼の説教や演説を行い、それらが新聞や雑誌に掲載されたり、パンフレットとして出版され、多くの国民に読まれることとなった。建国の父の死は、活字ビジネスの大きな機会となりえた。ウィームズは、ワシントンの死後1カ月ほどして再びケアリーに手紙を書き、自分の伝記の構成を伝えるとともに、出版を依頼した。「ご存じのように、ワ

シントンが逝きました。数百万の人々がかれについて何か読みたくて口を開けて待っています。」自著は、ワシントンの生誕から革命軍の指揮、大統領就任までをたどり、かれの信仰、愛国心、勤勉といった「偉大な徳をわれわれの若人の模範として提示します。興味深く面白い逸話で輪郭を描く、生き生きとした内容です。」牧師や教師など数人の知識人に読んでもらったが、皆出版を薦めてくれた。「25セントか37セントですばやく売れるでしょうし、[1冊の製作費は]10セントかからないでしょう」と書いた。(1/12 or 13/00; II、126-27) やはりケアリーからは何の反応もなかった。

1800年2月、ウィームズは、自分のワシントン伝の原稿を送り付け、ケアリーに出版を促し手紙にこう書いた。「雑誌『レディーズ・マガジン』に美しいワシントンの肖像が掲載されています。若く、美しく、知的なかれが描かれています。もしわれわれの小さな本に口絵としてそれを銅版にできれば、それは幸せな効果をあげるかもしれません。われわれの本は、小パイカの活字で、ロイヤル大の印刷紙4枚以上にはなりません。私は、数千部売ることができます。タイトルページ、献呈の辞(ワシントン夫人に捧げようと思います)、前文は、準備中です。」

(2/2/00; II、127) 出版を実現させる目的上、当然であるかもしれないが、多くの読者を獲得できるとする見通しを示し、そのために書物の内容(テキスト)、版型、価格、装丁、活字、さらに献呈の辞にまで配慮する周到さを示している。

結局、この依頼に対してもケアリーからは返事をもらうことができず、同年別の印刷業者(ボルティモアのG・キーティング)に依頼して出版することになった。その初版は80ページで、内容は上記ケアリーあて手紙で書いた構成にそっている。ただし、著者名は表記されていない。

以後、ウィームズは頻繁に手を加えながら、伝記を自分の理想に近いものへと仕上げていくが、その過程で読者獲得のために出版の諸装置を活用することになる。

1800年の第2・3版ではともに、ワシントン

の未亡人マーサへの献呈の辞が掲げられた。これは、著述の正当性を読者に意識させる仕掛けと見なすことができよう。これらはかなりよく売れたようであるが、ウィームズはひとまずワシントン伝記の執筆をこれで終えた。

1804年ころから、ジョン・マーシャル筆のワシントン正伝の出版に着手したフィラデルフィアの出版業者C・P・ウェインに接近して、ウィームズは南部におけるマーシャル著の伝記の販売と予約購読者の開拓に乗り出した。すでに合衆国最高裁首席判事となっていたマーシャルによる伝記に、ウィームズも期待するところが少なくなく、多くの販売を予期していたにちがいない。しかしながら、期待に反してマーシャルの伝記は、ウィームズにとってまさに時代錯誤的出版の典型でしかなかった。予約購読者の中にはすでに1802年に代金を支払った客がいたにもかかわらず、実際の出版は1804年によく始まり、完結するまでに約4年を要した。全6巻という途方もない大きさであり、これだけでも、きわめて限られた読者しか望むことはできなかったはずである。しかも、内容とは言えば、ワシントンの人格に立ち入らず、公的な政治的、軍事的記録に終始するだけであった。再び自分で、もっと面白くてためになるワシントン伝を広めることへの関心がウィームズのなかで再燃する。

ウィームズはケアリー宛の手紙で、マーシャルの伝記は「私のものほど道徳的でもないし、リパブリカンでもない」と不満を漏らした。(5/24/07; II, 362) マーカス・カンリフが言うように、ウィームズが「リパブリカン」という言葉で示そうとしたものは、フェデラリストに対する党派的な規定ではなく、私的な生活における徳と公的な行動とを不可分な関係とする共和主義的規範であろう。1809年のトマス・ジェファソン宛の手紙では、他の伝記作家たちのように、民衆にとっての軍人ヒーローとして誉め讃えたり、国家の進路を誤らせた貴族として非難するのではなく、「わが国の若人すべてが知っておくべき、またかれを愛しかれの徳に見習う真のリパブリカン」としてワシントンを

捉えたことを強調している。

1806年、ついにケアリーが、ウィームズの伝記を第5版として出版し、50セントで販売を開始した。ページ数はそれまでの版とほぼ同じ80ページだが、内容は大幅に書き換えられている。幼児期の重要な逸話が挿入され、桜の木やキャベツ文字のエピソードがここではじめて登場する。同年の第6版では、200ページを越える分量となった。著者ウィームズは、「元マウント・ヴァーノン教区牧師」と紹介された。すでに1804年にジョージアでの日曜説教の新聞記事でマウント・ヴァーノン教区牧師を自称していたが、言うまでもなく、「マウント・ヴァーノン教区」などは存在せず、完全なウィームズの創作であった。しかし読者は、故人をよく知り得る立場にある著者の姿を想像することになる。著者の肩書も、書物の価値の判断材料となる出版の装置であった。また、新たにヴァレー・フォージでの祈りや母の夢——これらの逸話は、すでにマーシャル著の伝記を売る際に、新聞などでの広告で用いていた——などの逸話を挿入した。

1808年に、ウィームズは著作権をケアリーに1000ドルで譲渡した。これはウィームズにとって取引としては失敗であり、「故ジョージ [ワシントン] の遺骨 [伝記] に宿る巨額のお金」をケアリーの手に渡してしまったことを後悔した。しかし後悔のもうひとつの理由は、著者として自在に改訂しにくくなったことであった。伝記を「自分の手から離してしまったことを悲しんでいる主な理由は、それが半分しか完成していないから」であり、「いくつかの最も価値ある章が、まだ付け加えられるべきだから」である、とケアリーに宛てて書いている。改訂すれば、もっと良くなり、もっと売れるという気持ちが表示されている。(1/13及び19/09; I, 47)

内容を改訂したいという提言と共に、3～4ドルの価格をつける「エレガント版」を出す提言をしたり、ラムゼイ著の伝記が倍の分量で活字も良いのに40セントであるのだから、自分のものも価格にふさわしくあと60～70ページ加え

たいと、ケアリーに打診した。(I、50-64) ケアリーは、こうした進言をすべて無視した。

1809年2月1日、ジェファソン宛にワシントン伝(第7版)を送付した際の手紙で、「これを学校の教科書として、推薦する一文を書いていただければ本当にありがたく存じます」と付け加えている。(II、389) 元大統領を宣伝の道具として利用しようとさえしている。

1806年の版以後、ほとんど手が加えられることなく刷られていき、ウィームズ死亡の25年までに29版を重ねることになる。ウィームズと同時代に現れたワシントン伝記としては、前述したマーシャルによる正伝、もっぱら軍事と政治面を扱ってはいるが、読み易い叙述の故に読者を集めたデヴィッド・ラムゼイの『ジョージ・ワシントンの生涯』(1807年)、牧師アロン・バンクロフト(歴史家ジョージ・バンクロフトの父)による伝記(1807年)、フィラデルフィアの出版業者トマス・コンディの『ジョージ・ワシントンの回想』(初版1798年、再版1800年)、ロンドンのジャーナリストであるジョン・コーリーのもの(1800年)などがあった。きびしい競争のなかでも、ウィームズの伝記が最も長く愛されることになるが、それは書物の中に込められた、読者にアピールする仕掛けと無関係ではないだろう。

1809年の「大いに改善された」第9版を手にとって調べてみよう。まずタイトルページを見る。出版者に関する表記を除いて、活字の大きい順にタイトルページの語句を並べると、GEORGE WASHINGTON (18ポイント)、THE LIFE (14ポイント)、CURIOUS ANECDOTES と BY M. L. WEEMS (10ポイント)、ついで EXEMPLARY TO HIS YOUNG COUNTRYMEN (8ポイントイタリック)、EQUALLY HONORABLE TO HIMSELF と EMBELLISHED WITH SEVEN ENGRAVINGS (8ポイント) となり、以下6ポイントの活字が続く。「ワシントンの生涯」というタイトルが大きいのは当然であるが、その次に「珍しい逸話」、「若き同胞にとっての模範たりうる」という語句が眼に入る。「7枚の彫版で飾られた」という語句もページの中央で

際だっている。活字の組み方も、購読意欲をそそる装置の一部として理解できるかもしれない。新聞に掲載されたヘンリー・リーの書評の一部を「推薦の言葉」としてタイトルページに転載しているのも、同様の意図によっている。以上の体裁はケアリーの発案・工夫であろうが、ウィームズの意向は十分にくみ取られているように思える。

本文に眼を移す。全体は、第1章から結語「ワシントンの遺言」まで、全17章構成の226ページとなっている。単純に計算すると、一章の平均が13ページである。各章は簡潔であるだけでなく、各章の冒頭に内容を要約する数行の見出しが付けられている。本文全体の目次はないけれども、この各章冒頭の見出しだけをながめることで全体の展開がつかめる仕組みである。

しかし、この本が手にとられて、ぱらぱらとながめられたとき、なによりも眼に飛び込んでくるのが、直接引用符でくくられる会話文の多さであろう。同時期の他のワシントン伝記や、ウィームズの伝記の逸話を借用した後世の伝記と比べても、ウィームズの伝記における会話の多用、およびその会話における通俗的な日常語表現には驚かされる。特に、父が「おおきな穏やかさと喜びでもって、ジョージを幸福な徳の道へと導いた」少年時代の叙述は、日常語会話によって組み立てられている。桜の木を切ったことを告白する場面をはじめとして、ジョージが徳と信仰を学ぶ過程は、ほとんどすべて父との会話という形式がとられている。しかもその会話では、ジョージは父親を“father”ではなく“Pa”と呼掛け、“can not”ではなく“can't”が使われた。ウィームズは、父と子の率直な会話の中に、徳のメッセージを直接的に読者に伝達する回路を見いだしていたのではないか。

18世紀においては、野卑な通俗的(vulgar)な言葉と洗練された(refined)言葉とが明確に区別され、日常語(vernacular)の中では「徳ある知性」を表現したり、理解することはできないとされた。しかし、革命と福音によって作られた共和政社会においては、普通のひとびとの日常語表現にも徳の存在が見いだされ、むしろ

ろ道徳や信仰の問題に関しては共和国市民同士が意見交換するときの平等な回路として、日常的なるものが賞賛されるようになる。ウィームズのワシントン伝における言語表現の特異性は、道徳や知識の伝達・共有の方法のこうした変化に対応して、多くの読者にメッセージが到達するよう工夫された書物の戦略の表出ではないだろうか。<sup>19</sup>

ワシントンの伝記がほぼ最終的に確定した1808年頃から、ウィームズは革命戦争で活躍したサウス・カロライナの英雄フランシス・マリオン（1732-95）の伝記の執筆を思い立った。まず、マリオンの部下として従軍したピーター・ホーリーから詳細な回想雑記を入手したウィームズは、その返礼の手紙の中で、マリオンを「永遠に人々の記憶にとどめておくことを目的に執筆を開始したい。[略] 3週間でそれ[ホーリーのメモ]に手を加えて[略]それから約3週間で、時には笑いを、時には涙を誘うスタイルになるよう脚色して仕上げられたらいいと思います」と記している（6/3/08; II、379）。あと数週間で、マリオン伝がいよいよ印刷所にまわることをホーリーに報告する際には「わたしにとって最大の期待は、それが公衆に受け入れられ、なおかつあなたの期待を大きく裏切らないものになることである。[略] サウス・カロライナやその他の所で、学校の図書になることを期待します」（2/5/09; II、390）と述べた。1809年の年末には、ウィームズはホーリー宛てに「前に言いましたように、私は私のやり方で書かざるをえなかったのでありまして、時代が小説を渴望していることを知っている私は、マリオン将軍に関するあなたの事実や考え方を軍記ロマンスの姿形のなかに収め入れるよう努めました」（12/13/09; II、427）と書き、大胆な娯楽読物風の伝記に変えたことを認めている。案の定、ホーリーは自分が残そうとした史実が虚構のロマンスに改造されたことに強く怒る。「私が書いた現実の歴史が、あなたによって、かいざんされ、台無しにされ、誤りに満ちたロマンスへと作り替えられたことは許しが

たいことである。たとえその本の売行きが迅速であったとしても。」（2/4/11; I、100-102）迅速な売行きを示したマリオン伝に満足するウィームズは、この批判を真剣に受け取らなかったにちがいない。ホーリーの憤りは、史実や原作よりも読者を重視するウィームズの姿勢をわれわれに印象づける。

### 結語——読者の共同体

誰が、ウィームズのワシントン伝を読んだのか、という問いに答えることは難しい。リンカンは、「子どものころを振り返って、本が読めるようになった一番最初に私が手にしたのはウィームズの『ワシントンの生涯』であった」と語っているが、こうした個人的な記録を数多く集めない限り、現実の読者像を描くことはできないだろう。しかし、それ以外に全く手がかりがないわけではない。カンリフが明らかにしたように、1830年代、40年代になると、ウィームズの伝記の逸話を取り込んだワシントン伝が多数刊行されるが、それらの多くは日曜学校関係の団体によって出版された。ウィームズの伝記には、この日曜学校に代表される、ある特定の有力な読者に向けて発せられたのではないかと思われる独特のメッセージを見いだすことができる。

建国の父の子供時代をあえて創作することに典型的に示されるように、ウィームズの主たる関心は、偉人の私的側面を取り上げることにあった。第1章において、公的な人物としての偉大さではなく、「私的生活の陰のなかに、われわれはその人物を見つめるべきなのである」と主張している。なぜなら、「私的徳こそが、すべての人間の卓越さの基礎であり、ワシントンをして『コロンビアの最初で最大の息子』とならしめたのであるから」と論じ、この私的生活における偉大さを「私たちの子供たちのあこがれの眼差しの前に、なによりもまず提示しようではないか」と述べる。<sup>20</sup>

19. Hatch, pp.17-46.

20. Cunliffe, ed., *The Life of Washington By Mason L. Weems*, pp.1-5.

しかし、ウィームズが強調する私的生活における徳の行いは、前近代的な古典的共和主義の枠内で説明できるものではない。私的徳——尊敬されるべきワシントンの4つの気質たる、信仰、慈愛、勤勉、愛国心——は金銭的・物質的利益に直結することが例示されるからである。まだ若い頃、「人並はずれた心の暖かさと高貴さを備えたジョージは病気の兄弟ローレンスを誠実に世話した。その結果、ローレンスが死亡したとき、かれは広大な地所のほとんど全部をジョージに残し、それがジョージの将来の栄光へのひとつの貴重なステップとなった」のである。徳と経済的成功を結合させることを通して、ウィームズは、到来しつつある産業化・市場経済社会における模範的な人間像をここで抽出した。<sup>21</sup>

だが、投機やギャンブルによる物質的利益追求がまかり通る産業化・市場経済社会においては、「私的生活の陰」には、時として個人の徳を圧倒するほど強力な誘惑や欲望が数多く潜む。独立戦争が終わり、ワシントンは本来の幸福で健康的な農場に戻った。しかし彼はすぐに、農民が「増加する農産物を国内の市場に輸送することができなければ、栄誉ある国土の名誉と利点を長期にわたって享受できないことを知り、合衆国を流れる良好な河川すべての間に運河や堀割をつくることが最大の重点であることを理解するよう国民に促した。」その結果、ジェームズ・ポトマック両川の航行を拡張することを目的に2つの会社が設立された。ワシントンの提言と尽力に感謝するため、会社はワシントンに4000ドル近い額に相当する会社の株を進呈すると申し出たが、ワシントンは即座にそれを拒絶した。もし受領するならば、「次に何を提言しても、お金が動機であると世間は疑うようになってしまかたないだろう。自分の国からお金を取ろうとは欲してもいないし、もしお金を求めるなら、お金よりもずっと価値ある国に奉仕

する権限を失うであろう。」<sup>22</sup>

ここで明らかにされるのは、誘惑や欲望の独走を抑制する自己統制・自己管理であった。出現しつつある社会が、とどまるところを知らない欲望と野心を醸成することを知るウィームズは、たんなる勤勉だけでなく、合理的で、生産的な生き方を追求する鉄の自己管理こそが成功への道であることを説く。ワシントンは時間を4つの大きな部門、すなわち睡眠、献身、リクリエーション、ビジネスに分割した。「自営のものであれ、公務であれ、ビジネスの時間というものは、なにものにも侵されることを許さない」のであった。<sup>23</sup>

ウィームズは、自分の著作を、他のワシントン伝記から区別し、一定の読者を得るために、建国の英雄の物語のなかに、産業化・市場経済社会における生き方を示す手引を注入したといえる。そしてこの手引は、日曜学校、ライシウム、図書館などの施設の創設や、マインド・コントロール、骨相学、禁酒運動等に着手したショップキーパー・自営職人・製造業者らには、有益なテキストとなりえた。かれらは、新しい社会の到来による機会の拡大を欲しながらも、それらが引き起こす社会変動を憂慮し、秩序維持のために上からの権力の行使ではなく、市民による自発的な自己抑制・自己向上の手段を探索していたのである。

しかも重要なことに、これらの人々は、南北戦争前のアメリカにおいて活字文化を支える中心的役割を担うことになる。数々の助言の書や同人機関紙の発行、あるいは図書の収集などを通して、一定の自立した固有の言説の生産—享受の循環が作り出され、いわば一種の解釈共同体づくりが進行し、拡大していく。そのような「読者の期待の地平」において、読者の読みのベクトルを方向づける出版の諸装置を備えたウィームズのワシントン伝は再読され、再吟味され、再生産されていくのである。

21. *Ibid.*, pp.21-23; Watts, p.145. なお、以下の議論は、ワッツの研究に負うところが多い。

22. Cunliffe, pp.128-30.

23. Watts, p.148.